色彩教材研究会通信　No.340　2023.6.1

発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●日本色彩学会に呟く

日本色彩学会の会員数が、減少傾向にあると聞いている。運営に学会費収入が多くを占めていると思われるので、心配である。

本学会は色彩学会と称しているので、色彩学の研究者が加入する学会である。ただ、色彩学部をもつ大学は聞いたことがない。私は、大学の工学部工業化学科を卒業したので、日本化学会の入っていたが、仕事で色の測定や色彩管理を、さらに色彩設計が必要になったので、1968 年に日本色彩学会の前身の色彩科学研究会に入れていただいた。

日本の大学に色彩学部も学科もない以上、色彩学研究室の存在を調べて、その学生や卒業生に入会の勧誘をするべきであろう。

本学会は、ファッションや美容関係の学会員も多いので、その方面にも働きかけると良い。それには求人活動が必要であろう。

また、日本色彩学会は東商などの色彩検定に協力して、収入を得ていたが、今は十に近い検定があり、多くの収入は期待できない。

これからは、しっかりした自前の「日本色彩学会色彩学検定」を発足させて、学会加入に直結するシステムの構築を模索する時期ではないかと、老いのたわごとではあるが、考えていただきたいと思っている。　（永田泰弘）

●旅でみつけた色　青いリンゴ

大阪中之島に 2020 年「こども本の森　図書館」が開館した。建築家・安藤忠雄氏が大阪市に寄贈したものである。

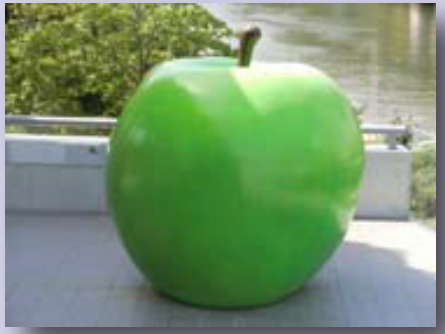
入り口のテラスには「青いリンゴ」の 2 メートルを超えるオブジェがあり、思わず駆け寄り触ってみたくなる。赤いリンゴではなく青いリンゴにした理由は、米国の詩人サミュエル・ウルマンの「青春の詩」からのイメージをオブジェにしたもの。「青いリンゴのまま走れ、人間も青いままが良い、青春のまま走る」という事だそうだ。

館内は階段・壁の隙間などに座り自由に本が読める。外でも自由だ。子供の健やかな成長を見守っている。

本のジャンルも「自然とあそぼう」「食べる」「きれいなもの・世界の色々ないろ」など興味をひく分類の仕方である。

新緑の若葉の季節、青いリンゴに触れて青春とは自分の心が決めるもの、若さとは年齢ではない・・納得した。

（Sizuka）



●大辞泉ひろいよみ　19 ーい

色眼鏡：着色したレンズを眼鏡。サングラスなど。偏った物の見方。先入観にとらわれた物の見方。

色めき立つ：緊張や興奮で落ち着かなくなる。動揺しはじめる。

色めく：その時節がきて色が美しくなる。華やかになる。色っぽく見える。緊張や興奮のために落ち着かない状態になる。活気づく。騒然となる。動揺する。戦いの敗れるようすが見え始める。

色物：色のついている物。衣服や繊維の白・黒以外のもの。寄席で、講談・義太夫・落語に対して、彩りとして演じられる漫才・曲芸・奇術・声色・音曲などのこと。

色物席：色物もまぜて上演する寄席。

色模様：彩りの美しい模様。美しい染め模様。歌舞伎などで、恋愛感情を描写する場面。また、その演技。主として淡く単純な物をさし、濃厚なものをさす濡れ場と区別される。

色焼け：顔やからだが、日に焼けて薄黒くなること。また、衣服などが日に焼けて変色すること。

色許し・色聴し：禁色を許されること。

色好い：こちらの望みにそうさま。都合がよい。好ましい。容姿が美しい。　（永田泰弘）